

Title	Gallia 63号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2024, 63, p. 181-183
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95768
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

卒業論文要旨

アンドレ・ジッド『女の学校』『ロベール』『ジュヌヴィエーヴ または 未完の告白』のエヴリーヌに関するマルシャンの役割

佐 伯 寧 彦

卒業論文では、アンドレ・ジッドの『女の学校』『ロベール』『ジュヌヴィエーヴ または 未完の告白』を取り上げ、エヴリーヌに関するマルシャンの役割を考察する。3章構成として、第1章では、エヴリーヌとマルシャンの出会いについて扱い、さらにマルシャンがロベールを相対化している様を分析し両者の人物像を比較する。第2章では、マルシャンの無神論をテーマとする。敬虔だったエヴリーヌが無神論者と変わっていく過程を取り上げる。第3章では、エヴリーヌのロベールからの自立へのマルシャンによる共感とその自立の帰結について考察する。

以上の分析と考察により、エヴリーヌが夫ロベールから自立していく過程のすべての局面で、エヴリーヌを自立に向かわせる役割をマルシャンが担っていることを明らかにする。そこには5つの役割が存在する。1つ目は、エヴリーヌの従属と自立の思想に変化のきっかけを提供したことである。これはマルシャンとの出会いによって為された。2つ目は、ロベールを相対化する役割である。マルシャンの存在によって、エヴリーヌの中で、ロベールが客観視される。3つ目

は、エヴリーヌに無神論を吹き込み、エヴリーヌの無神論を強化する役割である。敬虔だったエヴリーヌは無神論者へと変貌していった。4つ目は、エヴリーヌがロベールに反発することに対して共感する役割である。マルシャンによる共感が、エヴリーヌの自立の過程を支援している。5つ目は、エヴリーヌのロベールからの自立の帰結としての役割である。『ジュヌヴィエーヴ または 未完の告白』の最後の場面で、エヴリーヌはジュヌヴィエーヴにマルシャンを愛していたことを告白する。マルシャンと出会うことで、夫への従属の考えに変化が生まれ、ロベールの存在が相対化されたことを考慮すると、ロベールからの自立のきっかけはマルシャンであり、その帰結もマルシャンであるのだ。

パトリック・モディアノ『新婚旅行』における庇護者の希求

瀬 川 七 海

卒業論文の目的は、パトリック・モディアノ『新婚旅行』«Voyage de nocés»において語り手が行う旅は庇護者の希求に他ならないと明らかにすることである。

第一章では、『新婚旅行』の場面を(1)1941-2年、(2)1965、(3)1968、(4)1971、(5)1979、(6)1989の6つに分類した。

第二章では、庇護者の役割には、自己肯定を与える役割、モラトリアムを許容

する役割、アイデンティティの基盤を与える役割、の三つが存在することを明らかにした。第一節では、イングリッドの庇護者・リゴは代父の役割を果たすことにより、イングリッドに自己肯定とモラトリアムの許可を与えている点を示した。第二節では、まず語り手の第一の庇護者・イングリッドについて、彼女が代母の役割を果たすことにより、語り手にアイデンティティの基盤を与えている点を示した。次に、第二の庇護者アネットについて、彼女がイングリッドの代理人の役割を果たすことにより、語り手に自己肯定とモラトリアムの許可を与えている点を示した。

第三章では、語り手はアイデンティティとモラトリアムの許可を得るため、イングリッド・アネット二人の庇護者を希求していることを明らかにした。まず、語り手がアイデンティティ形成のためにイングリッドの記憶を再構成し、庇護者への回帰を試みている点を示した。次に、語り手がモラトリアムへの残留を目的としてアネットの庇護の獲得をも同時に試みている点を示した。そして、記憶の再構成は成功するがイングリッドは死んでいるためアイデンティティ形成は不成功に終わること、またアネットの庇護の獲得も不成功に終わることを指摘した。

結論部では、『新婚旅行』はユダヤ人女性イングリッドを主要登場人物としている点でショアを主題としているのみならず、アイデンティティ形成の過程を同時に主題としている点が特徴的であるとしてモディアノの著作の中に作品を位置づけた。

ユイスマンス『さかしま』における室内の展示を巡る思想

田代航大

ユイスマンスの小説『さかしま』において、主人公デ・ゼッサントは、自らの好みや哲学に沿った物を蒐集し、それによって館の室内を装飾する。本論は、その室内の展示に注目し、それが持つ性質や、デ・ゼッサントの思想について考察する。

第一章では、先行研究をもとに、安寧と幸福に満ちた創造力の源としての室内である「夢の部屋」という概念について考察する。先行研究において『さかしま』は「夢の部屋」を描いていると説明されることがある。しかし、デ・ゼッサントは、室内の展示によって神経症を悪化させていることが物語内で示唆されている。そのため「夢の部屋」という概念だけでは『さかしま』を説明しきれない。

第二章では、絵画と植物という二つの展示に焦点を当てて『さかしま』における「室内の展示」の性質について分析する。これら二つは当初、興味深く、好ましいものとしてデ・ゼッサントを喜ばせるが、やがて恐怖の感情や病的な悪夢を喚起し、彼を苦しめるようになる。彼の神経症の原因が「室内の展示」にあることがここから確認できる。彼は自分が好む物を蒐集し部屋に展示しているのだが、それによって自分が苦しむことになるのである。

一見矛盾したこの性質を説明するため、第三章では「驚異の部屋」という視点を導入し、これをもとに『さかしま』

を読解することを提案する。十五世紀から十八世紀にかけて流行した珍品収集室である「驚異の部屋」の根底には、神への畏敬という思想がある。『さかしま』において、デ・ゼッサントは異形あるいは人工的な物を志向しているのだが、その根幹にある思想も神への畏敬である。神への畏敬すなわち「崇高」とは、「驚異」および「恐怖」に連なる概念である。デ・ゼッサントの目的は単なる幸福ではなく「崇高」を目指すことであったからこそ、その営為は「恐怖」に辿り着かざるを得なかったことが「驚異の部屋」という視点によって示されるのである。

ジャン＝ジャック・ルソーにおける文学と政治

山 口 昂太郎

ルソーは多面的な側面を持ち、さまざまな矛盾を抱えた人物としても知られ、各著作同士の断絶、また著作内部での矛盾が、これまでに指摘されてきた。矛盾の一つと考えられる、ルソーにおける「文学」と「政治」の間をどのように架橋するか、という問題意識のもと、『ダランベールへの手紙』 *Lettre à d'Alembert sur les spectacles* と『社会契約論』 *Du Contrat Social ou principes du droit politique* を、習俗 *mœurs*、世論 *opinion*、市民像の三点から検討し、両者の連続性を考察した。

第一章では『ダランベールへの手紙』の演劇批判をつぶさに見ていくことで、演劇と習俗の関係を整理し、作品の道徳的評価と観客に与える効果が峻別されて

いることを示し、役者と市民が「自分自身」 *lui-même* であるかどうかをめぐって対立関係にあること、ルソーが演劇とは対照的に擁護するジュネーヴの習俗セルクルが熟議する公共的な組織であることを論じた。第二章では、『社会契約論』『ダランベールへの手紙』を併読し、法、習俗、世論の概念を明確にした。ブリュノ・ベルナルディが位置づけた、理性的な法や道徳とは異なる「世論」が受け持つ価値の領域、つまり共同体維持のための市民の情念的な一体化作用を参照項にすることで、ルソーが演劇を、道徳的規範というよりは価値規範（市民間を取り結ぶ価値観や情念）への悪影響という観点から批判していたこと、ゆえに演劇は市民相互の一体化を阻むために共和国の国家基盤である法や国家の秩序を揺るがすとルソーが考えていたこと、セルクルが熟議（法）と同時に世論の形成を担うものであることを示した。第三章ではルソーの市民像が「自分自身」を持ち自分に基づいた意見のみを述べることを重要視していることに着目し、演劇と代議制の批判を「自分自身」を代理することへの批判として解釈し、ルソーの思考には文学と政治の両者に共通してリプレゼンテーションへの批判があるという考察を行った。